

縁起の思想から見たケアの関係性

坂井 祐円

京都大学大学院教育学研究科紀要 第58号

2012

縁起の思想から見たケアの関係性

坂井 祐円

1. はじめに

ケアは関係性によって成り立っている。通常、ケアの関係性は、[ケアする人—ケアされる人]という枠組みのもとで理解される。このとき、ケアする人は常にケアする人であり、同じく、ケアされる人は常にケアされる人なのであろうか。答えは否である。いったんケアの実際に入ってしまうと、[ケアする人—ケアされる人]という枠組みでは図れないような関係性を経験するからだ。

たとえば、ケアしているうちに、ケアの相手（ケアされる人）を通して様々なことを教えられ、ケアする人のほうがむしろケアされていると感じることが、しばしばある。あるいは、ケアに専心的に集中していると、ケアしているといった意識が曖昧になり、相手と一体となった感覚が広がってゆくこともある。

つまり、ケアの関係性は、[ケアする人—ケアされる人]という枠組みに収まり切らず、この枠組みから出発しつつも、流動し、変化してゆくのである。こうした現象を《ケアの関係性が深まってゆく》と表現することができると思う。

この《ケアの関係性が深まってゆく》プロセス、その成熟のあり方や特質を描写して、一つのチャート（見取り図）を示すことはできないだろうか。

その際、従来のケア論のコンテキスト¹では、この課題に応えることは困難ではないかと思う。というのも、これらはケアを考える上で、まず個人の存在が単位となり、個人と個人がやりとりすることで関係性が形成される、という思考様式を前提にしているからである。こういった思考様式のもとでは、ケアの関係性は固定されてしまい、その変化や流動は、個人の能力や性質などに帰属してしまうことになろう。それでは、ケアのもつ豊かな創造性や可能性を閉じてしまうのではなかろうか。

そうではなく、関係性がまずあって、その関係性において個人が現象している、あるいは、関係性という力動において、そのつど個人が立ち現われてくる、とでも言ったらよいだろうか。[関係性が存在に先立つ]という考え方。そのような思考様式に照らしてケアを捉え直さなければ、《ケアの関係性が深まってゆく》プロセスをうまく描き出すことはできないように思うのである。

この[関係性が存在に先立つ]という思考様式に立った関係性（relationship）の思想を代表するものに、仏教の縁起思想²を挙げることができる。関係性を扱っている思想³はいくつかあるが、縁起の思想、その中でも華嚴哲学⁴の説く法界縁起の思想は、関係性によって存在が解体されるだけでなく、存在解体の後に、多様な意味的連関のもとに存在が再び生成されることを説いている点で⁵、際立っている。言わばここには、関係性がいかにして成熟してゆくのかを考察するための方途が、見事に示さ

れているのである。

したがって、本稿では、華嚴哲学の法界縁起の思想に照らして、《ケアの関係性が深まってゆく》プロセスを描写することが適切であると考ええる。また、そうした作業を通して、ケアの営みがまさしく関係性のダイナミズムであることを明らかにできると思う。

2. ケアとケアリング

考察を始めるに当たって、まずは本稿が扱おうとする「ケア (care)」とはどのような概念なのかを素描しておこう。

ケアという言葉は、「関心」、「注意」、「配慮」、「心配」などの意味を基礎とし、そこから展開して、「手入れ」、「世話」、「援助」、「養育」などの意味をもつ実践概念である⁶。これらの意味を踏まえると、ケアのあり方は、とりわけ意識の本質に根ざしていると言える。現象学派が、意識の本質について「志向性 (Intentionalität)」に求めたことはよく知られている。意識とは、世界を分節するはたらきであり、常に「何かについて意識している」という仕方で成立している。ケアとは、意識が生活世界において具現化した様相を示しているのであり、意識の志向性をそのまま継承していると言ってよい。したがって、ケアは常に「何かについてケアしている」という意識状況を指すのであり、そこでは必ず何らかの対象が希求されていることになる。

ケアの対象は多様であるが、本稿では基本的に「他者へのケア」を問題にする。これは医療や看護、介護や福祉、教育や心理カウンセリングなどの社会的な現場を構成しており、一般に「対人援助 (human support)」と呼ばれるケアの領域である。要するに、「他者へのケア」とは、自己と他者との間にケアという関わりが起きている、その当態を指していることになるろう。

さて、この「他者へのケア」について考えるとき、そこでは、ケアという概念の性格上、どうしても「ケアする人—ケアされる人」という枠組みを設定せざるを得ない。それゆえ、ケア論の主流は、この枠組みのもとでケアの営みを理解し、両者の応答関係を重視する「ケアリング (caring)」の考え方に集約することになるろう。

ケアリング論の旗手としてしばしば取り上げられるノディングス (Nel Noddings) は、ケアする人が相手をケアしていると意識しており、同時に相手もまたケアする人によってケアされていると意識している状態にあることを、ケアリングの成立条件に挙げる⁸。ここには、ケアされる人のニーズや呼びかけにどう応えてゆくのがケアする人の責務であり、そのためには、ケアする人とケアされる人の役割が明確に区別され、かつ非対称な関係でなければならないとする主張がある。

けれどもノディングスは、ケアにおける専心 (engrossment) や共感 (empathy) について述べる際には、この役割の区別から逸脱することをほのめかしている。ノディングスにとって、専心とは「相手と感覚を共有すること (feeling with)」であり、それは「他者に向かって専心することで、感覚が共有され、他者それ自体が自己を突き動かす力として立ち現われてくる」ことだという⁹。また、共感とは「相手の感覚や所作が現れるままに自身を委ねること (receptivity)」であるとし、「相手を対象化した上で自身の理解や考慮を投影すること (projection)」という対象論理的な一般の定義を批判している¹⁰。

この点に関して興味深い洞察を与えるのは、ノディングスに先駆けてケアリング論の方向性を示し

たメイヤロフ (Milton Mayeroff) である。メイヤロフは、ケアする人とケアされる人の関係を「補充的 (appropriate)」であるとし、ここからケアのもつ意義を、ケアされる人が人格的に成長してゆくことを助けるとともに、そのことによってケアする人もまた人格的に成長してゆくといった、相互の人格変容に求めている¹¹。

メイヤロフは、ケアする人とケアされる人との補充的な関係について、さらに「差異の中の同一性 (Identity-in-Difference)」の関係として考察している。

ケアリングにおける同一性の感覚は、差異の意識を含んでおり、差異の意識には同一性の感情を含んでいる。そこでは、私たちを包んでくれている何ものか、私たちが関わっているという感覚がある。¹²

この一文には、ケアする人とケアされる人の両者が、それぞれの役割上の区別から差異の意識もちつつも、これを超え出て相互に影響しあう存在としての同一性の感情に芽生えてゆく、というプロセスが暗示されている。このとき「私たちを包んでくれている何ものか」が立ち現われてくるという指摘は注目される。メイヤロフは、この「何ものか (something)」について、ケアが包括的で十分に機能しているときには、ケアする人もケアされる人も「場の中にいる (In-Place)」ことが可能になると述べる¹³。「場 (Place)」とは、固定的・実体的な入れ物ではなく、絶えず新しくなりそのつど再認識される力動であり、ケアの関係性を生きる者がそれぞれに自身を満たして、生の意味を十全に感得するための源泉である。

ノディングスは、専心や共感を考察する中で、[ケアする人—ケアされる人]の枠組みが流動する方向を示唆してはいるものの、結果的には、そうした流動をケアする人の意識変容の問題に還元しており、ケアの関係性の変化とは考えていない。これに対し、メイヤロフは、ケアリングの関係を包み込む「場」について言及しており、個人と個人のつながりを生起させる力動を捉えようとしている。

ただし、メイヤロフの場合であっても、基本的な立場は個人という存在単位を前提にしており、そうした個人と個人が関わりをもつことで、その根底に個人を超えて支える根拠性を見出すことができると指摘しているにすぎない。つまりこれは、存在に先立つケアの関係性を見据えながらも、理念的な認識にとどまっていることになろう。

このように見てゆくと、ノディングスやメイヤロフは、結局のところ、西洋的な自我中心の論理に立ってケアリング論を展開しているとする見方が可能かもしれない。ユング心理学者の河合隼雄は、東洋的な見方に立った心理療法論の展開を試み、自我中心の論理では説明のつかない問題として、夢の事例を取り上げている。たとえば、夢の中で、はっきりともう一人の自分に出会うという体験をすることがある。いわゆる「二重身」の夢であるが、河合は自身が見た、「治療者」として病院の廊下を歩いていた自分が、「患者」として診察を待っている自分に出会う、という夢を紹介している¹⁴。

自分が治療者であると同時に患者であるという夢の中の体験は、「私とは何か」という問いへと河合を誘うことになる。ここで河合は、華嚴哲学の法界縁起の思想に考察の手がかりを求めてゆく¹⁵。東洋的な「私」は、個人として明瞭に分けられる西洋的自我とは異なって、一切のものに依りかかって存在している。それは、多重性を帯びた相互連関の全体性が流動変化してゆく中で、その結節点として仮に生起しているにすぎず、本来は実体のないあり方をしている。ここには、関係性が存在を絶えず生み出しながら変転してゆく、という構図を見出すことができる。こうして「私」は、あらゆるものとの相互連関的な共同性を生きているのであり、このことが心理療法の場面で実現したときには、

融和的共存的なセラピストとクライアントの関係が形成されることになるのである。

東洋的な観点から捉えられたケアの関係性は、ノディングスやメイヤロフが指向するケアの関係性とは思考様式を異にする。とはいえ、これらは別次元の問題ではなく、位相の転換による関係性の深まり、成熟の過程として複合的に位置づけることができるだろう。法界縁起の思想には、そうしたプロセス展開を可能にするダイナミズムが含まれている。以下、詳しく考察を試みたい。

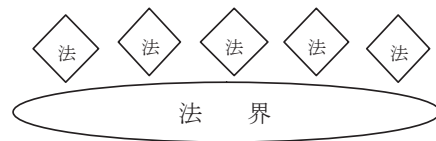
3. 法界縁起の思想

法界が縁起している。法界を起点とし、法界を中心として、事物・事象が関係し合っている、という考え方。法界縁起の思想をごく簡単に要約すればこうなる。

「法界」とは、ダルマ・ダートゥ (dharma-dhātu) というサンスクリット語の漢訳で、「存在するものを存在として成立させている基盤」といった意味である。仏教では、同一性と固有性を保って存在している事物・事象を、「法」(=ダルマ・dharma) と呼ぶ。この法が、なぜ持続的に存立することができるのかと言えば、これを支える何らかの基盤、根拠、原理があるからに違いない。そういう発想から見出された概念が、法界である。

法は法界において成り立つ。現象としての法 (=ダルマ)、これを支える理念としての法界 (=ダルマ・ダートゥ)。構図的にはこのような形式となる。(図1)

図 1



すなわち、法界とは、個々に存在する様々な事物・事象の相互関係を支える、関係性のことにほかならない。存在は関係性において成り立つ。[関係性が存在に先立つ] ということ。これが法界という概念を通して見えてくる思考様式である。

ところで、こうした個々の存在との対比において規定される法界=関係性の概念は、どうしても理念的・場所的なニュアンスを伴うことになる。また、それゆえに、静態的で実体的な印象を与えることにもなる。しかし、そのような理解は、現象世界を対象的に把握する自我意識を起点としたパースペクティブに依拠しているために生じるのである。

自我意識によって現象世界を見ると、法界は背後に隠れてしまう。対象的に把握された世界は、様々な存在が恣意的に分節された世界であって、それらの存在を存在として成立させるような原理は感覚では捉えられない。個々の存在をつなぎ支えている法界=関係性の概念は、ただ直観的にのみ了解され得る、理念上の世界に属していよう。

ところが、いったん法界=関係性の概念が出されて [関係性が存在に先立つ] という転換が起こるならば、対象認識の統覚である自我意識は解体され、あらたに法界を起点・中心とするパースペクティブに開かれることになる。このパースペクティブに依拠することによって、存在する事物・事象の相互の影響関係や移り変わってゆくあり様などが、すべて法界から現起していることに、気づかされるのだ¹⁶。

事物・事象は、法界より生じ、法界がはたらき出すことで変化し、やがてまた法界へと還ってゆく。法界によって現象世界は生滅変化を繰り返す。事物・事象は法界の輪の中に織り込まれている。法界は現象世界を絶え間なく紡ぎ出す、動性そのものである。(図2)

このような法界を起点としたパースペクティブに依拠して開かれる関係性のあり様が、法界縁起の関係性である。自我意識から見れば、法界は静態的な理念であるが、法界から見れば、法界自体がはたらき出して現象世界を生み出してゆくという、動態的な関係構造へと様変わりするのである。

法界縁起の思想は、こうした法界と現象世界との関係構造をベースとしながら、さらに事と理という2つの存在様式を導入して、4つの位相に開かれた体系として整理されている。

「事」とは、生滅変化に基づく存在様式であり、「理」¹⁷とは、不生不滅に基づく存在様式を意味する。不生不滅という表現はわかりにくいだが、別の仏教語で言えば、「空」であり、すべてがつながって溶け合っているあり方のことを指す。

また、事と理は、認識論的な観点から見ると、「分別」の有無が問題となっている。つまり、世界を個々バラバラに分割して見るのか、分割されていない一つの全体として見るのかの違いである。事とは分別の世界、理とは無分別の世界を、それぞれ指している。

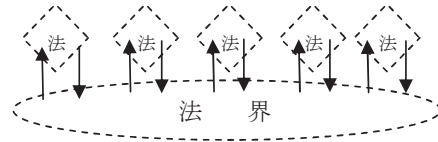
この事と理の概念を、法界の関係構造に取り入れることで、法界の4つの位相が見出されることになる¹⁸。4つの位相とは次の通りである。

- ①事法界
- ②理法界
- ③理事無碍法界
- ④事事無碍法界

この中、①事法界とは、事として現われる法界のあり方、事の関係性である。同様に、②理法界は、理として現われる法界のあり方、理の関係性ということになる。この二つの法界は、事と理の概念がそのまま反映されている。すなわち、事法界は、多種多様に分割された個々の事物・事象が、それぞれに関係し合いながら、刻々と移り変わってゆく関係性である。これに対し、理法界は、事物・事象が解体され、分割される以前の全一なる空の世界が開かれることである。それは、存在の同一性や固有性の境界が無くなって、すべてが溶け合っ一体化している関係性である。

③理事無碍法界は、事法界と理法界とが同時に現われている法界のあり方と言ってよいだろう。字義通りには、理と事が障碍することなく融通している関係性であり、つまりは、現象の中に空が隅々まで滲みわたっている、もしくは、空が現象の中を縦横無尽にはたらいている、といった関係性である。ここには法界縁起の基本的な構図が描かれている。法界がはたらき出して現象世界が生み出されるという場合、法界とは理法界であり、現象世界とは事法界ということになるのである。こうして、

図 2

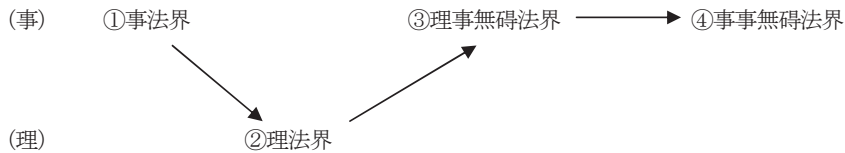


理法界が事法界のあり様の中に浸透することによって、事物・事象が別々に存在していながらも、深くつながり合っていることに気づかされる。それが理事無碍法界の関係性である。

最後の④事事無碍法界は、字義通りには、事と事が障碍することなく融通している法界のあり方ということになる。事が事のままで充溢しており、理が消え去っている。消え去っているといっても、無化したのではなく、あえて焦点を当てる必要がないのである。言うなれば、理即事であって、理が事となって遍満しているのだ。したがって、事事無碍法界の事は、事法界の事とは大きく異なる。事法界の事は、個々の事物・事象が相互に関係しているのみであったが、事事無碍法界の事は、事のうちに理が含まれていることで、表層における事物・事象の関係性が、その深層においてさらに細密な事物・事象が幾重にも連なった関係性に支えられている、という多重の関係構造をもつのである。

この事事無碍法界の多重性は、『華嚴経』に説かれる「一即一切・一切即一」や「一微塵の中に一切法を見る」といった世界観を反映したものである。あらゆる存在が重層的につながり合い、それが今・ここに一つの存在となって集約され、成就している。一つの存在が宇宙全体と連動しているという、事事無碍法界の壮大かつダイナミックな展開に開かれたとき、今・ここに在ることの深さ、かけがえのなさ、尊厳性が、極めてアクチュアルに迫ってこよう。そして、そのことによって日々の何気ない出会いや出来事のすべてが、あるがまま意味の深まりとして感得されることになるのである。

さて、以上のように法界の4つの位相について考えてみると、これら4つの位相は、そのまま関係性の段階的な成熟過程を描いている、と理解することができよう。それぞれの法界の内容を考慮すれば、その成熟過程はおよそ次のような図式を描くことになると思われる。



おそらくはケアの関係性もまた、このような成熟過程を辿るのではないか。そこで次節では、この法界縁起の思想を踏まえながら、ケアの関係性の深まりについて考えてゆくことにしたい。

4. ケアの関係性

《ケアの関係性が深まってゆく》。ここでは、そうした深まりを、法界の4つの位相の成熟過程に重ね合わせて、4つのステージとして捉えることができると思う。

その際、出発点となるのは、[ケアする人—ケアされる人]という枠組みである。この枠組みが変化し流動してゆくことが、ケアの関係性の深まりであった。それゆえ、この枠組みの位置づけが、4つのステージのそれぞれの図柄を特徴づけることになる。

1) 事法界としてのケアの関係性

このステージでは、[ケアする人—ケアされる人]の枠組みがはっきりと固定している状態を考えることができる。

坂井：縁起の思想から見たケアの関係性

原初的なケアの関係性が成り立つためには、まずケアを求める人がいて、その求めに応答しようとする人がいなければならない。ケアを求める人が未成熟であればあるほど、これに応答する人は必然的に成熟さが（精神的にも能力的にも）求められることになる。というのも、両者がともに未成熟なままにケアの関係性に入ってしまうと、ケア自体が機能不全を起こしてしまうからである。

ここから、ケアを求める人はケアされる人として、これに応答する人はケアする人として、固定した役割の区分が生まれる。このとき、ケアする人は、「私はこの人をケアしている」という自覚的な意識をはっきりと持っており、またケアされる人は、「私はこの人からケアされている」という意識をはっきりと持つことになる。

さらに、このステージでは、ケアする人は、ケアされる人を対象化し、意図的に分離することによってケアが営まれる。ケアされる人を対象化することで、客観的に分析することが可能になり、ここからケアされる人の状況や状態を診断して治療的に介入することへと発展することにもなる。また、対象化によって、ケアする行為がケアされる人の抱える苦悩や問題を解消するための技法・技術として捉えられることにもなる。

一方、ケアされる人もまた、自身の抱える苦悩や問題が解消されることをケアに求めているのであり、その範囲においてケアする人からのケアを受け容れている。極端な場合、ケアする人の行為が、ケアされる人のニーズに適用ものでないときには、ケアの関係性は直ちに消滅してしまうのである。

ケアする人とケアされる人との間には、ケアを通して苦悩や問題を解消していこうとする共通した目標が作り出されるために、そこに同盟的な感覚が共有されることになる。それは表面的には利益関係のように見えるが、この関係性にはともに目標に向かって進んでいこうとする協同意識が横たわっているのであり、そうした意識がケアする人とケアされる人の関係を支えているとも言えるだろう。

2) 理法界としてのケアの関係性

このステージでは、[ケアする人—ケアされる人]という枠組みが完全に取り払われて、両者の区別がなく一体化している状態を考えることができる。

法界縁起の思想的コンテクストからすれば、それは空になることである。仏教の修行者は覚りを目指して修行するわけであるが、その覚りの状態が空である。したがって、空になることは究極的な出来事であって、容易なことではない。ましてやケアの関係性を通して実現することなど、果たして可能であろうか。

ケアの関係性において空になるとは、空の状態を獲得することではなく、空が顕現してくる事態と捉えることができよう。では、どのようにして、空は顕現するのか。

それは「専心 (engrossment)」を契機として開かれると言える。ケアの関係性では、そこに参入する人々の意識は、互いに、自分ではなく他者に向けられることになる。ケアする人は、専心的にケアに集中することによって、ケアされる人に対し、脱自的に自らを明け渡す。ケアへの専心は、ケアする人の固有性と同一性を解体する。そしてそのことによって、相手 (ケアされる人) を受け容れるとともに、ケアの関係性の内部へと入り込んでゆく。同時に、ケアされる人もまた、ケアする人が専心的に自分に関わることによって、自らの問題をケアする人に委ねることができ、そこから脱自的にケアの関係性の内部へと沈潜してゆく。こうして相互に脱自化することで、ケアする／ケアされるという区切りが消え去り、そこにケアの関係性のみが突出することになる。そうしたケアの関係性の開けに

において、空の顕現は起こるのである¹⁹。

これは、ケア論のコンテキストからすれば、「共感 (empathy)」が起こってくるプロセスを辿っているように見える。共感にも様々なレベルがある。他者の中で起こっている感情体験を、過去に起こった自己の似たような経験に照らして類推的に再現することで、理解を試みることも、共感である。けれども、空の顕現に類比される共感は、むしろそうした対象把握的な共感を離れることによって、起こるのである。それは、存在全体が融和する体験であり、合一の体験と呼んでもよいかもかもしれない。自己が他者であり、他者が自己であるような、共に一つの世界を生きている体験である²⁰。

このような共感体験（あるいは共感現象と言うべきか）は、根本的な変容を伴わざるを得ない。自己を自己のままにさせない。他者も他者のままでいることができなくなる。本当の意味で他者に出会うことによって、翻って新たな自分と出会うほかなくなるのだ。ここでは、即座にある苦悩や困難な状況を解消すること以上に、自身の人格的な成長や成熟こそが重要な課題であることに気づかされる。言わばこれは、ケアのターニングポイントである。

したがって、このステージでは、ケアの枠組みが解体されると同時に、ケアの新たな局面が開かれることにもなる。

3) 理事無碍法界としてのケアの関係性

ケアの関係性における事法界から理法界へのプロセスは、ケアの実際においてしばしば経験する流れであるとも言えるだろう。ここでのケアの関係性の変化は、ケアする人とケアされる人との内面的な距離が次第に縮まり、やがて融和する関係を生み出してゆくことである。その意味では、理法界としてのケアの関係性は、ケアの一つの着地点ということになる。

しかしながら、ケアの関係性はここで終わらない。さらに飛躍的な展開へと向かう。理事無碍法界としてのケアの関係性が、ここから開かれるのである。

このステージでは、事法界としてのケアの関係性のうちに、理法界としてのケアの関係性が深く入り込み、浸透してくる。そして、理法界としてのケアの関係性に支えられて、事法界としてのケアの関係性が成り立っている、という二重構造が浮かびあがってくる。

このとき、[ケアする人—ケアされる人]の枠組みは、表面上は保たれているとしても、仮のものにすぎない。とはいえ、それは、ケアする/ケアされる、という分節が意味をなさなくなることではない。分節のあり方が質的に変容しているのである。

それは、ケアする人にとっては、「私はこの人をケアしている」という意識から「私は、この人をケアすることによって、ケアされている」という意識への転換として表われる。また、ケアされる人にとっては、「私はこの人からケアされている」だけでなく、「私とこの人を包む何かによってケアされている」と感じることである。

そうした意識や感覚は、ケアの主体が、ケアする人やケアされる人にあるのではなく、ケアの関係性それ自体にある、という自覚的な様態から呼び起こされる。いったん理法界としてのケアの関係性に沈潜し、脱自的に他者と出会って、そこから戻ってきた意識からすれば、私もあなたも、ともに関係性の中で生きているのであり、関係性によって今ここに生成していることが、リアルに感じられてくる。そこに立ち現われてくる他者の世界は、二重性を帯びており、しかも自身にとって意味深いものとして感得されることになろう。

ケアする人からすれば、相手（ケアされる人）が、苦悩や困難な状況を抱えて彷徨しながらケアを求めてきたとしても、そのことを客観的な分析の対象とはしない。そうした苦境を抱えた相手が、私の前に立ち現われてきた意味を感受しつつ、関係性にはたらいっている生成力に注目してゆく。つまりは、生成力が相手をどこへ導こうとしているのか、そして、生成力が私に何を期待しているのかを見極めてゆく。

生成力の見極め²¹⁾は、相手の進むべき方向性を指し示すという能動的なケアの形をとって現われることもある。あるいは、相手の変容や成長の方向性を生成力に委ねて、それが少しずつ促されていく展開を見守り支えるという、受動的なケアとして現われることもある。そうしたケアする人の所作や言動や判断などもまた、関係性にはたらく生成力の力動性のもとで生み出されてゆく。しかも、こうした自覚に立ったときには、ケアする人は、自身がケアする主体とは感じられなくなる。ケアする主体は関係性にはたらく生成力であって、ケアする人もまた、そうした生成力によってケアされていると感得するのである。

ケアする人が、立ち現われてくる他者の世界の二重性を自覚しつつ、ケアされる人と向き合うときには、ケアされる人もまた、世界の二重性に包まれていることに気づかされる。それは表面的にはケアする人の感化によってもたらされるが、実質的には、ケアする人との関係性の中にはたらく生成力が、ケアされる人を包み込むのである。そうしたとき、ケアされる人は、深く受容され肯定されて安らいだ感覚となり、自身の抱える困難を契機として、成長していこうとする意欲が湧き起こってくる。

このように、理事無碍法界としてのケアの関係性とは、世界の二重性において、ケアする／ケアされるという関係が生成されていることを主題とするステージなのである。

4) 事事無碍法界としてのケアの関係性

華嚴哲学の法界縁起思想に依拠してケアの関係性を考える限り、このステージは、ケアの関係性の極まった状態であり、最も成熟した段階として位置づけられよう。

この事事無碍法界としてのケアの関係性を描き出す上で、注目すべき観点は2つある。1つ目は、事と事が幾重にもつながり合って融通しているという多重構造によって関係性が成り立っていること。2つ目は、「一即一切・一切即一」という表現によって示される、個々の存在のかけがえのなさ、尊厳性を問題にしていること。

1つ目の観点からすれば、[ケアする人—ケアされる人]の枠組み自体が、多重性を帯びていることになる。それは端的に言えば、この二者関係を取り囲む多重世界が力動的に関係しているケアの関係性を捉えている。

ケアする人もケアされる人も、ケアの関係性に参入する以前から、様々な世界を背負って生きている。そうした多様な世界は、ケアの関係性の中で、意識されることなく様々な形をとって現われている。ケアの関係性とはケアする人とケアされる人のそれぞれの背後にある多様な世界の絡み合いと言うこともでき、それが多重世界となって[ケアする人—ケアされる人]の枠組みの内側にラディカルに浸透し、両者の人格的な変容や成長に大きな影響をもたらすのである。

ここでいう多重世界とは、肉体をもって生きる環境世界とは限らない。その拡がりには、美的世界や知的世界、歴史世界やイデア的世界、さらには、異界（他界）にまで及ぶこともある。たとえば、それは、異世代の人であったり、異邦人であったり、動物や植物であったり、自然の妙なる息吹きで

あったり、芸術作品であったり、書物であったりする。あるいは、歴史的建造物であったり、歴史上の人物の生き方であったりする。あるいは、哲学的概念であったり、作品の構想であったりする。さらには、死者であったり、印象深い夢や幻視であったりするのである。

これらの多重世界の住人たちは、時間や空間を超え、布置的に、そして共時的に、ケアの関係性の中に現われ出てきて、変容や成長の契機となってゆく²²。その意味では、[ケアする人—ケアされる人]の枠組みは、単なる二者関係に収まらない。そこには、多重世界の住人たちもまたケアに参入してくるのであって、ケアの関係性は無限の多重性にかかれてゆくことになる。

そして、ここから2つ目の観点がつながってくる。すなわち、ケアの関係性が無限の多重性にかかれていることが、「一切即一切—一切即一切」として表われていることなのである。それは、ケアの関係性に参入してくる一つ一つの事物や事象（そこには観念やヴィジョンなども含まれていよう）が、それぞれに多重世界との無限の連関性の中からアクチュアルに立ち現われてくることであり、そしてまた、それぞれが相互にケアし、ケアされる関係となって、無限に続いてゆくことを指している²³。

さらに、ここから翻って、再びケアの関係性において関わり合う二人（ケアする人・ケアされる人）の関係に戻ってみるならば、このケアの関わりは、言わば、ダイナミックな宇宙全体の揺らめきが凝縮し結晶する中で成就しているのであり、それゆえに関わっていることがそのまま十全であり、充足していることに気づかされる。もっと言えば、ケアの関係性において、二人の人間が今ここにおいて共に在ること自体が、存在全体として、かけがえがなく、尊厳性に満ちているのである。そうして、ケアの関係性を生きる二人は、出会うこと、関わり合うこと、それぞれの所作や言葉のやりとりなど、そこで起こる一つ一つの事柄が、あるがままに深い意味として、感受し合うのである²⁴。

このように考えてゆくと、事事無碍法界としてのケアの関係性とは、結局のところ、共に在ることの充溢感と喜びに満たされた関係性であり、また、あるがままに他者を感受し合う関係性であると言える。それはつまり、共に在ることが、ケアの関係性の無限の多重性に支えられて、今ここに開かれているということであり、さらには、共に在ることにおいて、そこに参入する一人一人が、生きるこの意味を確認し、今この生にしっかりと根を降ろすことができるということなのである。

5. おわりに

本稿では、ケアの関係性の深まり、その成熟過程について、華嚴哲学の法界縁起の思想に依拠して4つの位相に分けて描写することを試みた。

こうしたプロセス展開は、たとえば、子どもの養育や心理療法のように、特定の相手との二者関係がある程度長期間にわたって持続している場合に限って、確立するものであって、短期間のもしくは一度しか関わらないような相手に対するケアの場合には、意味をなさないように見える。

しかしながら、本稿において試みたプロセス展開の構図は、決して時間的なものとは限らない。むしろ無時間的構造的なプロセスの深まりとして理解することもできるのではなからうか。たとえば、表層的には事法界としてのケアの関係性であっても、深層を見据える眼（この眼は多分にケアする側に開かれていよう）においては、事事無碍法界としてのケアの関係性が実現していることも、十分にあり得るはずである。

私たち日本人は、縁起の思想が何であるのかを理論的にはよく知らなくとも、人と人との印象的な

出会いを「ご縁ですね」と表現することで、その本質を直観的に感じ取っている。「ご縁」という日本語は、日常の感覚では決してつかみ切ることのできない無数のつながりや条件などが重なり合うことによって、一つの意味深い出会いが生み出されている、その不可思議さや感嘆を伝えている言葉である。この短い言葉には、人と人とが出会うことのかげがえのなさや尊さが、まさしく凝縮されている。そしてまた、そういった意味深い出会い＝「ご縁」を通じて、ようやく私たちは、今・ここに開かれている世界の奥深さや価値の重さに気づくことができるのである。

ケアの関係性とは、その時その場における「ご縁」を形づくるものであろう。したがって、ケアが継続的なものであれ、一過的なものであれ、そのつどの関わりにおいて、《ケアの関係性が深まってゆく》プロセスが実現しているのであり、完全なる出会いに満たされているのではなからうか。ケアの関係性のプロセス展開を考察する意義は、こうした点に見出せると思われる。

註

- 1 「従来のケア論のコンテクスト」とは、次節において検討するケアリング論を念頭においている。
- 2 縁起 (prāṭhyasamutpāda) とは、詳しくは「因縁生起」のことで、その原型となるのは、直接的で内的な要因 (因) と間接的で外的な条件 (縁) とが相互に作用し合って、結果が生み出される、という因果関係の道理である。仏教では、この因果の道理を根幹としたいくつかの縁起観が提出されており、その解釈の展開に注目することによって、仏教思想史のエポックを見出すこともできる。原始仏教の十二縁起説では人間の実存苦の原因を問題にしていたが、大乘仏教の中観哲学では、世界の相互連関を論理的に解明する縁起説へと発展し、さらに華嚴哲学の法界縁起思想において、縁起は存在論的に解釈されることとなった。(中村元選集第 16 卷『原始仏教の思想Ⅱ』春秋社・1994 年)
- 3 関係性をめぐる諸思想については整理が必要であり、今後の課題である。参考までに以下の研究書を挙げておくにとどめたい。高橋勝・広瀬俊雄編『教育関係論の現在』川島書店・2004 年、西谷敬『関係性による社会倫理学』晃洋書房・2006 年、宮澤康人『(教育関係)の歴史人類学』学文社・2011 年。
- 4 華嚴哲学とは、大乘仏典『華嚴経』に基づく思想体系を指す。これは、東アジア仏教の一つの集大成であり、東洋思想を代表する世界観であると言ってよい。中国唐代の学僧である法蔵 (643 - 712) によって確立され、日本では奈良時代に華嚴宗として移植された。(『華嚴思想 (講座大乘仏教・第 3 卷)』春秋社・1996 年)
- 5 華嚴の法界縁起思想が、存在解体から相互連関性のもとに再び存在が生成してくる構造をもつことを明確に指摘したのは、井筒俊彦である (井筒俊彦著作集第 9 卷『事事無礙—理理無礙—存在解体のあと』中央公論社・1992 年)。井筒は、ポストモダンの思想状況を視野に入れつつ、東洋思想の共時的構造化の観点から法界縁起を分析し、とくに「存在解体のあと」として位置づけられる事事無礙法界について、詳しく論じている。
- 6 ケアに関する考察は、Reich, W. T. (ed.) “*Encyclopedia of Bioethics*,” 3rd edition, Macmillan Reference, 2004. にある、‘CARE’ の項目を主に参照した。
- 7 以下のケアリングに関する考察は、次の著書を主に参照した。中野啓明『教育的ケアリングの研究』樹村房・1999 年、中野啓明他編『ケアリングの現在』晃洋書房・2006 年。
- 8 Noddings, N. “*Caring: A Feminine Approach to Ethics and Moral Education*”, University of California Press, 1984, p.69.
- 9 Ibid., p.35.
- 10 Ibid., p.31
- 11 Mayeroff, M. “*On Caring*”, Harper & Row, New York, 1971, p.72
- 12 Mayeroff, M. “*On Caring*”, “*International Philosophical Quarterly*”, Vol. V, No.3, 1965, p.464.
- 13 Mayeroff, M. “*On Caring*”, p.68-72.
- 14 河合隼雄『ユング心理学と仏教』岩波書店・1995 年、132 頁～138 頁
- 15 河合前掲書、139 頁～147 頁
- 16 法界に対するパースペクティブの違いは、教会的に見ると、唯識哲学と華嚴哲学の「真如」についての捉え方の違いを反映している。真如とは、縁起の理法を指し、法界の概念に通じているが、唯識哲学ではこれをあくまで現象世界を規定する理念として捉えた (真如不変説) のに対して、華嚴哲学では縁に随って現象世界にはたら

き出すと捉えた(真如隨縁説)のである。これは、凡人の分別意識(世俗諦)から出発するか、覺者の智慧(勝義諦)から出発するか、という立場の違いから起こってくるのである。(竹村牧男『華嚴五教章を読む』春秋社・2009年)

- ¹⁷ 「理」とは、中国思想(とくに老荘思想)の文脈では、人間が随順すべき自然の道理を意味するが、そこから事物・事象に内在する普遍的な真理という考え方へと発展し、中国仏教の中に導入されることになった。したがって、「理」に対応するインド仏教の概念はなく、中国の伝統思想に基づいた中国仏教特有の概念である。(小野沢精一他編『氣の思想—中国における自然観と人間観の展開』東京大学出版会・1978年)
- ¹⁸ 法界縁起観の4つの位相(四法界説)についてまとめたのは、中国華嚴宗の澄観(738-839)である。四法界説の詳しい内容については、次の論文を参照した。鎌田茂雄「法界縁起と存在論」『講座仏教思想・第1巻「存在論・時間論」』理想社・1974年。
- ¹⁹ 自己の脱自化からケアの関係性に沈潜して区切りが消えるというプロセスは、西田幾多郎の『私と汝』の考察に依るところが大きい。西田は次のように述べる。「…自己が自己の中に絶対の他を含んでいなければならぬ、…自己は自己自身の底を通して他となるからである。何となれば自己自身の存在の底に他があり、他の存在の底に自己があるからである。…私の底に汝があり、汝の底に私がある、私は私の底を通じて汝へ、汝は汝の底を通じて私へ結合するのである…」(『私と汝』(『西田幾多郎全集・第6巻』岩波書店・2003年))
- ²⁰ 存在全体が融和し、自己と他者とが一体感をもつ体験は、社会学者の作田啓一が「溶解体験」と呼ぶ存在の生成現象に近いであろう(『生成の社会学をめざして—価値観と性格』有斐閣、1993年)。作田は、この「溶解体験」について、「自己は対象の中に没入し、対象は自己の中に浸透する。自己と対象が一つの全体の中で融合している。自己と外界とのあいだに境界は存在しない」と説明している。これは西田の考察(註19を参照)に通ずるところがある。
- ²¹ 生成力の見極めに対するケアする側の自覚について指摘したのは、対話の哲学者マルティン・ブーバーである。ブーバーは、ロジャーズとの対話の中で、ケアされる人にはたらく生成の力の力動を見極めて、その人が善なる方向へと進むように導くことが、ケアする人の責務であると主張し、独自のケア論を展開した。(Anderson, R. & Kenneth, N.C., *“The Martin Buber ~ Carl Rogers Dialogue, A New Transcript with Commentary”*, State University of New York Press, Albany, 1997)
- ²² 多重世界の住人たちとの出会いとは、ユングが「個性化過程 (Individuation)」の理論によって明らかにしたような、「自己 (Selbst)」元型 (Archetyp) の全体構造化において表われる諸元型の目的論的な発現を、ひとまず想定している。自己元型は、個体が変容し成長してゆくことを見越して、様々な印象深い体験のシナリオを外的世界と関連しつつ布置的に用意している。(林道義「ユングの元型をめぐって」『ユング心理学の方法』みすず書房・1987年)
- ここでは、ユングの自己元型の概念を敷衍して、外部世界の出来事をメタファーとして感受する「元型イマージュ」の機能を問題にしている。「元型イマージュ」は、無意識に飛散するイマージュ群を「意味エネルギーの傾向性」によってひとつの方向へとまとめて、外部世界のリアリティとつないでゆく。ここから、心的エネルギーが、人格的・非人格的なヴィジョンや観念、あるいは物理的な事物や意味深い出来事となって表われ、意識の変容に影響を与えることになるのである。(西平直「元型・イマージュ・変容—「魂の学としての心理学」のために」『岩波講座・宗教10「宗教のゆくえ」』岩波書店・2004年)
- ²³ こうした無限の相互連関をヴィジュアル的に表現したのが、華嚴哲学において用いられる「インドラの網」の譬えである。帝釈天(インドラ神)の宮殿に飾ってある網には、その無数の結び目の一つ一つに宝珠がぶら下がっており、その宝珠の表面は鏡のように反射しているために、それらの宝珠が互いに映し合い、映された宝珠もまた映し合い、無限に映し合っているという。華嚴哲学では、このことを「重重無尽」とも表現している。
- ²⁴ こうした関わりについて、現代のケア論の文脈の中からあえて抽出すれば、最晩年のロジャーズが提唱した「プレゼンス (presence)」という概念が近いかもしれない。プレゼンスとは、そのセラピスト(もしくは、ファシリテーター)がそこに居るだけで、存在するだけで、場の空気や流れが解放され、そこに居合わせた人々の自己洞察が自然と滑らかに進んでいくという、ケアする人の純化した態度を指している。(Carl Rogers, *“A Client-Centered/Person-Centered Approach to Therapy”*; in *“Psychotherapist’s Casebook: Therapy and Technique in Practice”*, Jossey-Bass, 1986.)

(臨床教育学講座 博士後期課程3回生)

(受稿2011年9月2日、改稿2011年11月25日、受理2011年12月26日)

The Relationship of Care from the viewpoint of Pratītyasamutpāda Thought

SAKAI Yuen

The relationship of care is usually based on the structure of “the person who cares for – the person who is cared for”. However, this structure is variable in an actual relationship of care. We cannot really explain this structure of variable in the relationship of care as long as we have a thinking pattern that mutual communication between individuals makes a relationship. This thinking pattern is based on a unit of existence of the individual. Conversely, we must think that the relationship comes before the individual, that is, the active relationship produces a unit of existence of the individual. Indeed, this idea originates in the pratītyasamutpāda (Japanese: Engi 縁起) thought of Buddhism. The pratītyasamutpāda thought argued that all living things influence and depend on each other. This is exactly the relationship thought. According to the pratītyasamutpāda thought, especially, Huayan (Japanese: Kegon 華嚴) philosophy as its completed form, the relationship reaches full growth with four aspects that proceed step by step. Therefore, the relationship of care also would reach full growth with four stages based on these four aspects.